



日本医科大学大学院医学研究科分子遺伝医学分野

酒井 真志人

2020年8月1日に日本医科大学大学院医学研究科分子遺伝医学分野に着任いたしました，酒井真志人です。このたびは研究室紹介の機会を頂きまして，ありがとうございます。私は神戸大学医学部を卒業後，4年間の内科臨床を経て，大学院入学後より研究を開始しました。その後，2013年から国立国際医療研究センター研究所糖尿病研究センター分子代謝制御研究部の室長を務めた後，2016年よりカリフォルニア大学サンディエゴ校のChristopher K. Glass教授の研究室に留学いたしました。この留学は，日本生化学会の早石修記念海外留学助成によってサポートして頂きました。お世話になりました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

私たちの研究室は，根津神社に隣接した基礎医学大学院棟の3階にあります。研究室の窓からは，春のつつじ，秋の紅葉といった境内の豊かな自然を楽しむことができます。

分子遺伝医学分野では，これまで30年間に渡ってウイルスベクターを中心とした遺伝子治療の研究が行われてきました。私自身は，生体恒常性と疾患発症に関わる分子機構に興味を持って研究していますので，研究室の方向性としては大きく変わったこととなります。異分野への挑戦を促進し，得意分野が異なる教員がお互いに助け合うことができる環境を作っていきたいと考えています。教育におきましては，私たちの教室は，医学部1，2年生の分子遺伝学教育に取り組んでいます。

私は，渡米前，糖尿病の病態形成に関する研究に従事し，主に肝細胞における，糖新生系酵素遺伝子の転写制御の解析を行っていました。留学先としましては，ゲノミクスを使った研究に挑戦することを目的として，マクロファージにおける転写制御を研究対象としている研究室を選びました。生体のほぼ全ての組織にはマクロファージが

存在し，免疫応答および組織恒常性の維持に関与しています。組織マクロファージのユニークな形質は，組織環境におけるシグナルによって確立・維持されていますが，その分化メカニズムは十分に理解されていません。また，疾患においては，病態形成に関与する疾患特異的マクロファージの出現メカニズムの理解が重要と考えられます。私は，肝臓マクロファージを研究対象として，肝臓の組織マクロファージであるクッパー細胞の分化・機能維持に必要な肝臓由来シグナルを同定しました。また，非アルコール性脂肪肝炎の肝臓に存在する，多様なマクロファージ集団の同定と転写制御機構の解析を行ってきました。

今後，私たちの研究室では，臓器内の細胞間相互作用や生体膜脂質の組成に着目した代謝・疾患研究を行っていく予定です。また，遺伝子細胞治療の研究も継続しております。大学院生，ポスドクを随時募集しておりますので，興味のある方はご連絡頂ければと思います。今後とも，ご指導，ご鞭撻を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。



写真1 研究室のある基礎医学大学院棟



写真2 研究室のメンバーと（右から三人目が筆者）